

〈健康教育〉

## 健康相談の充実を図る支援の工夫

——生徒指導部会でのサポートシート活用を通して——

沖縄県立那覇商業高等学校養護教諭 伊志嶺 孝子

### I テーマ設定の理由

近年、社会や生活環境が大きく変化する中、児童生徒の健康問題の多様化・複雑化が指摘されている。特に心の健康問題は複数の要因が複雑に絡むことが多く、より専門的な視点での対応が求められている。平成21年改正「学校保健安全法」では、養護教諭とその他の職員が連携した健康相談と、学校と医療機関等との連携が新たに位置付けられた。さらに、教職員以外の専門スタッフの参画充実が求められるなど、「チームとしての学校」の体制整備が重要となっている。

本県では、平成28年1月実施「子どもの貧困実態調査」において、沖縄の子供の貧困率が全国の約2倍という深刻な結果が示され、同年4月から「沖縄県子どもの貧困対策計画」が推進されている。学校においては、「令和2年版学校教育における指導の努力点」の中において「中途退学対策の強化」「定時制・通信教育の充実」「子供の貧困対策の推進」などが努力事項として掲げられており、学校課題の明確化、指導体制の充実、深い生徒理解及び生徒の自己肯定感を育む支援が求められている。特に、貧困対策は中途退学対策と重なる部分が大きく、高校における就学継続のための支援として、沖縄県立那覇商業高等学校定時制課程（以下「本校」）において、今年度、県内定時制高校では初となる居場所づくり事業が開始された。現在、名称「ひまわり」（以下「居場所ひまわり」）として生徒の居場所が設置され、新たに居場所ひまわり支援員（以下「ひまわり支援員」）2名が加わった。さらに、居場所ひまわりで過ごす生徒の様子を共有する場として、ひまわり支援員を交えた生徒指導部会がスタートしている。生徒が抱える課題対応において、養護教諭が教職員や外部専門相談員（以下「相談スタッフ」）との連携の中心となり、効果的な生徒支援につなげることが重要になっている。

本校の生徒数は61名で、複雑な家庭環境や経済的問題を抱える生徒、小・中及び前籍校での不登校経験や学習面での課題を持つ生徒など、様々な背景を抱えた生徒が在籍しており、多くの生徒が入学後も個別の支援を必要としている現状がある。令和元年度の保健室利用状況は180件で、そのうち内科的症状を訴えて来室した生徒は83.9%となっており、身体的不調の背景に、心の健康問題や複数の要因が重なるケースも少なくなかった。保健室は多様な健康問題を抱える生徒が来室し、細やかな対応が求められる場所であるが、生徒が抱える課題が複雑化・困難化しており、養護教諭のみの対応では限界を感じることもあった。本校では、昼礼後に生徒情報交換を実施し、教職員間で生徒情報を共有している。その中で養護教諭は、気になる生徒の状況や配慮事項についての要請をこまめに行っている。しかし、生徒情報交換は生徒情報の共有を中心としているため、複雑化・困難化した課題の解決にあたっては、具体的支援の検討と早い段階から組織的対応を行う必要がある。

そこで、健康相談の充実を図る支援の工夫として、生徒指導部会でチーム支援の視点を取り入れたサポートシートを活用し、養護教諭が把握した気になる生徒の多面的理解と支援検討を試みる。サポートシートは1枚のシートで、生徒の多面的理解につながる生徒情報と生徒支援の内容が可視化できる。これにより、健康問題の背景の把握ができ、支援方針及び支援方法の検討や役割分担の明確化が期待できる。さらに、サポートシートを教職員及び相談スタッフと共有することで支援の方向性をそろえ、チームとして効果的な支援につなげることができると考え、本研究テーマを設定した。

〈研究課題〉

健康相談の充実を図るために、生徒指導部会においてサポートシートの活用を通じ、効果的なチーム支援につなげることができるよう、健康相談に対応する組織体制整備の工夫を行う。

## II 研究内容

### 1 健康相談について

#### (1) 健康相談とは

平成 21 年「学校保健安全法」が一部改正され、第 8 条（健康相談）が規定された（表 1）。従来、健康相談は、学校医・学校歯科医が行うものとされてきたが、多様化・複雑化する児童生徒の健康問題への解決にあたり、特定の教職員に限らず養護教諭、学校医・学校歯科医・学校薬剤師、担任教諭など関係教職員による積極的な参画が求められるようになった。文部科学省「教職員のための子どもの健康相談及び保健指導の手引き」（平成 23 年）（以下「健康相談の手引き」）において、「健康相談の目的は、児童生徒の心身の健康に関する問題について、児童生徒や保護者等に対して、関係者が連携し相談等を通して問題の解決を図り、学校生活によりよく適応していくように支援していくこと」と示されている。また、「心身の健康問題を解決する過程で、自分自身で解決しようとする人間的な成長につながることから、健康の保持増進だけではなく教育的意義が大きい」とされており、健康相談は学校教育において重要な役割を担っているといえる。大谷尚子ら（2016）は、健康問題の解決へ向けた関わりを通し、「情緒の安定が図られ、学校生活への適応の基盤を作ることができる」とし、健康相談の目的の達成により得られる成果の一つとして、「自己肯定感を抱きながら他者とのかかわりができるようになり、現在の生活（家庭、学校、社会）により良く適応していくようになる」と述べている。健康相談における教職員や相談スタッフによる生徒支援の関わりの中で、支援対象生徒の心身の安定が図られ、学校生活における自己存在感を高めるとともに、自己肯定感を育むことにつながると考える。

#### (2) 健康相談における養護教諭の役割

平成 20 年中央教育審議会答申では、子供の現代的な健康課題の対応に当たり、養護教諭が校内外の連携においてコーディネーター的役割を担う必要があると提言された。さらに、平成 27 年中央教育審議会「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」（以下「答申」）では「養護教諭は、学校に置かれる教員として、従来から、児童生徒等の心身の健康について中心的な役割を担ってきた。今後は、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーが配置されている学校において、それらの専門スタッフとの協働が求められることから、協働のための仕組みやルールづくりを進めることが重要である。」と示されており、養護教諭のコーディネーター的役割は重要である。

また、答申では「養護教諭は、児童生徒等の身体的不調の背景に、いじめや虐待などの問題がかかわっていること等のサインにいち早く気付くことのできる立場にあることから、近年、児童生徒等の健康相談においても重要な役割を担っている。」と示されている。養護教諭は、様々な問題を抱える生徒と保健室で関わる機会が多く、心身の健康問題の早期発見、早期対応における役割は大きいといえる。

#### (3) 健康相談の基本的なプロセスについて

「健康相談の手引き」を基に作成した健康相談の基本的プロセスを図 1 に示した。

##### ① 健康相談対象者の把握

健康相談の対象者は表 2 に示された児童生徒などである。今年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による休校が続いたことや感染拡大防止による保健室利用制限があり、保健室利用が少なかった。そのため本研究では、生徒登校時に実施している

表 1 健康相談の法的根拠

学校保健安全法（平成 21 年 4 月 1 日施行） （健康相談） 第 8 条 学校においては、児童生徒等の心身の健康に関し、健康相談を行うものとする。
--

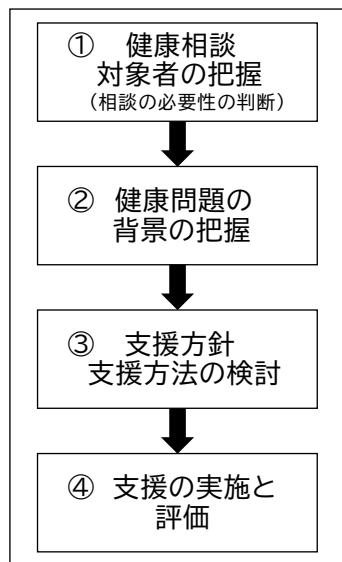


図 1 健康相談の基本的なプロセス（一部改変）

健康観察・体温チェックの機会や、日常の生徒との関わり、欠席状況などから養護教諭が把握した気になる生徒を支援対象とする。

### ② 健康問題の背景の把握

関係者との情報交換により、児童生徒を多面的・総合的に理解し、問題の本質をとらえるとともに、学校内の支援で解決できるものか、外部機関との連携が必要かを判断する。養護教諭の職務の中心となる保健室は、だれでも安心して利用できる場であるが、生徒の健康問題が多様化・複雑化している中、身体的不調の背景に様々な要因が関わっている場合も少なくない。問題の把握にあたっては、保健室で得られた情報だけでは不十分であり、心身の健康問題を抱える生徒を多面的・総合的に理解し、問題の背景を的確にとらえるためにも、関係職員との情報共有が重要であり、組織的に機能する情報共有の場が必要である。本研究では、養護教諭が把握した生徒情報に加え、支援対象生徒の担任及び生徒指導部メンバーからの情報を生徒指導部会で共有し、健康問題の背景の把握を行う。

### ③ 支援方針・支援方法の検討

校内組織で支援方針・支援方法を検討し、関係者で支援チームをつくり、役割分担し組織的に早い段階から対応していくことが大切である。そのためには、健康相談に対応できる組織体制を整備し機能させることが重要となる。本研究では、生徒指導部会で支援方針・支援方法と役割分担を検討し、チーム支援につなげていく。

### ④ 支援の実施と評価

校内組織の場で定期的に支援生徒の変容を把握し、支援方針や支援方法を見直し、評価を行う。本研究では、生徒情報交換の場で支援対象生徒の変容について定期的に確認し、支援の評価を行う。

## 2 チーム支援について

### (1) チームとしての学校

答申においては、複雑化・困難化した子供たちの課題に学校でより効果的に対応していくためには、心理や福祉の専門家を活用し、子供たちの様々な情報を整理統合し、アセスメントやプランニングをした上で、教職員がチームで、問題を抱えた子供たちの支援を行うことが重要であると提言されている。図2は、答申に示されている「チームとしての学校」のイメージを本校向

表2 健康相談の対象者	
① 健康診断の結果、経過観察が必要とされた児童生徒	
② 保健室等での対応を通して健康相談が必要とされた児童生徒	
③ 日常の健康観察の結果、健康相談が必要とされた児童生徒	
④ 健康相談を希望する児童生徒	
⑤ 保護者等から相談依頼のあった児童生徒	
⑥ 学校行事に参加させる場合に必要と認めた児童生徒	
⑦ その他	
「健康相談の手引き」より	

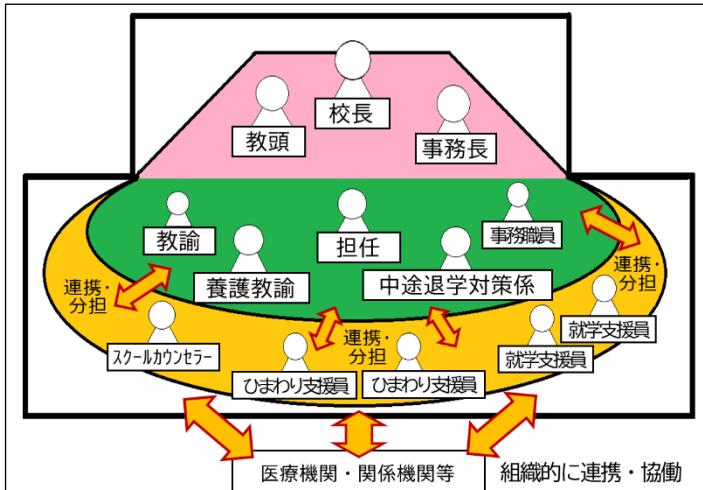


図2 本校における「チームとしての学校」のイメージ

けに改変したものである。現在、本校には相談スタッフとして、非常勤職員のスクールカウンセラーと就学支援員、常勤職員のひまわり支援員が配置されている。多様な専門性や経験を有する相談スタッフが学校の教育活動に参画することから、教員も相談スタッフも「チームとしての学校」の一員として、目的を共有し、取組の方向性をそろえることが重要である。チーム学校の機能を活かして教職員と相談スタッフが連携・分担する体制を整備し、健康相談体制を充実させる必要がある。「健康相談の手引き」では、健康相談の実施にあたり、組織的対応の必要性と健康相談に対応できる組織体制づくりの重要性が述べられており、新たに組織をつくることが困難な場合には、教育相談部や生徒指導部など、既存の組織を活用し対応できるようにすることが示されている。

本研究では、表3のメンバーで構成された生徒指導部会において、教職員と相談スタッフで支援検討の体制をつくり、チーム支援を機能させていく。

#### (2) サポートシートについて

健康問題の背景を把握し、支援につなげていくためには、生徒を多面的・総合的に理解する必要がある。石隈利紀・田村節子(2003)は、子供への援助の方法について判断するためには、情報を収集し、まとめる必要があると述べている。また、子供の学校生活をトータルに援助することが大切であり、情報を整理し、援助の焦点を考える領域として、①学習面、②心理・社会面、③進路面、④健康面の4つの領域を示している。「健康相談の手引き」においては、問題背景の把握にあたり、医学的要因(病気・障害等の有無)、心理社会的要因・環境要因(友人関係や家族関係等)の視点が示されている。

本研究では、生徒の多面的理解につながる情報収集の視点と支援方針、支援方法、役割分担が書き込めるサポートシートを作成し、生徒指導部での活用を図る。サポートシートは本校生徒の実態に合わせ、生徒の多面的理解の視点として、①学校生活、②学習面、③心身の健康、④人間関係、⑤家庭環境、⑥仕事・アルバイトの視点を設定した(表4)。さらに、既往歴やこれまでの相談スタッフとの面談状況などの情報を加え、支援方針及び支援方法と役割分担、支援期間を書き込める様式とした。また、支援の評価日を設定し、生徒変容の経過や支援の評価検討ができるようにした。サポートシートは養護教諭が試案作成後、生徒指導部会で検討し、図3に示す様式での活用を図った。

## III 研究の実際

### 1 実態把握

#### (1) 生徒の実態について

生徒の実態把握のため、全生徒(休学生を除く47名)を対象に調査を実施した(回収数29名、回収率61%)。

#### ① 自己肯定意識尺度の結果分析

本調査は、平石賢二(1990)により作成され、青年期(中学生から大学生)における自己肯定意識の発達のあり方を検討する目的で使用されている。本研究では、対自己領域の3成分「自己受容」「自己実現的態度」「充実感」の17項目を用い、一部伝わりにくい表現について

表3 生徒指導部会支援検討メンバー

〈従来の生徒指導部メンバー〉		〈追加メンバー〉	
• 生徒指導主任	• 教頭	• 養護教諭	• ひまわり支援員
• 中途退学対策係			
• 生徒会係			

サポートシート		生徒指導部会	令和 年 月 日 ( )	記録
参加者	<input type="checkbox"/> 教頭 <input type="checkbox"/> 養護教諭 <input type="checkbox"/> 中退係 <input type="checkbox"/> 生徒指導主任 <input type="checkbox"/> 生徒会 <input type="checkbox"/> ひまわり支援員	年 氏名	[本人の願い]	
[気になる様子]				
学校生活	<input type="checkbox"/> 欠席・欠課多 <input type="checkbox"/> 保健室利用多	学習面	<input type="checkbox"/> 未履修懸念	家族図
心身の健康	<input type="checkbox"/> 身体的不調 <input type="checkbox"/> 精神的不安定 <input type="checkbox"/> 自傷行為 <input type="checkbox"/> 希死念慮	人間関係	<input type="checkbox"/> 友人関係(校内・外) <input type="checkbox"/> 家族関係	
家庭環境	<input type="checkbox"/> 経済状況 <input type="checkbox"/> 家庭環境変化	仕事・アルバイト		
既往歴や今までの関わり	面談歴 SC:			
支援方針 (支援の大きな柱)	就学支援員:			
支 援 案				
誰が	誰が			
支援内容 何を	支援内容 何を			
いつまでに / 状況 <input type="checkbox"/> 済 <input type="checkbox"/> 取組中 <input type="checkbox"/> 未取組	いつまでに / 状況 <input type="checkbox"/> 済 <input type="checkbox"/> 取組中 <input type="checkbox"/> 未取組			
生徒変容等	生徒変容等			
誰が	誰が			
支援内容 何を	支援内容 何を			
いつまでに / 状況 <input type="checkbox"/> 済 <input type="checkbox"/> 取組中 <input type="checkbox"/> 未取組	いつまでに / 状況 <input type="checkbox"/> 済 <input type="checkbox"/> 取組中 <input type="checkbox"/> 未取組			
生徒変容等	生徒変容等			
誰が	誰が			
支援内容 何を	支援内容 何を			
いつまでに / 状況 <input type="checkbox"/> 済 <input type="checkbox"/> 取組中 <input type="checkbox"/> 未取組	いつまでに / 状況 <input type="checkbox"/> 済 <input type="checkbox"/> 取組中 <input type="checkbox"/> 未取組			
生徒変容等	生徒変容等			
〔役割分担〕 担任・教科担当・中退係・養護教諭・生徒指導主任・進路主任・管理者・部活動顧問 生徒会・書類・事務・スクールカウンセラー・就学支援員・ひまわり支援員				
評価 ( / )	<input type="checkbox"/> 状況改善 <input type="checkbox"/> 状況変化なし <input type="checkbox"/> 状況悪化 <input type="checkbox"/> 終了 <input type="checkbox"/> 継続支援 <input type="checkbox"/> 支援再検討			
生徒情報交換 共有 予定日: / ( ) → 生徒情報交換 評価 予定日: / ( )				

図3 サポートシート

表4 サポートシート情報収集の視点

① 学校生活	② 学習面
③ 心身の健康	④ 人間関係
⑤ 家庭環境	⑥ 仕事・アルバイト

では趣旨を変更せず、わかりやすい表現へ書き換えて使用した。さらに、本尺度得点の高校生全体平均値（平石 1993）と、本校生徒の尺度得点平均値を比較した（図 4）。

調査の結果、自分の個性を尊重し受け入れている意識的側面の「自己受容」については、尺度平均値とほぼ同程度であった。また、意欲をもって取り組むべき課題への動機的側面である「自己実現的態度」は、尺度平均値より高い傾向がみられた。生活を楽しいと感じ、好きなことをできていると感じる感情的側面の「充実感」は、尺度平均値より低い傾向であった。学校生活を楽しいと感じられる雰囲気づくりなど、生徒一人一人が充実感を実感できる工夫が必要と考える。

## ② 学校生活満足度尺度（高校生用）の結果分析

本調査は、河村茂雄（1999）により開発され、高校生の学校生活における満足度を「承認得点」と「被侵害・不適応得点」の2つの尺度から測定するものである。承認得点と被侵害・不適応得点の全国平均値と比較し、①学校生活満足群、②侵害行為認知群、③非承認群、④学校生活不満足群の4群に分類している。

調査の結果、本校生徒の実態として、「非承認群」に16名、「学校生活不満足群」に7名が分布していた（図 5）。「非承認群」の生徒は、学校生活に積極的な意味を見いだすことが少なく、何らかのきっかけ要因が加わると不登校から中退に至る可能性があるとされている。また、「学校生活不満足群」の生徒は、不登校や中退に至る可能性がとても高いと思われ、自分から対人関係や学級集団との関わりを求めることが少なく、学級集団のなかで孤立している可能性や、対人関係に自力で解決できない不安やトラブルを抱えている可能性があるとされている。調査結果から、個別の支援が必要な生徒が多数在籍していることが明らかになった。学校生活において、生徒が存在感や承認感を感じられるような、丁寧な関わりが必要と考える。

## (2) 教職員及び相談スタッフの実態について

### ① 教職員調査（事前）結果より

本校教職員を対象に調査を実施した。調査内容は、笠井孝久（2015）、春日由美（2018）の先行研究を参考に、①生徒支援、②校内支援体制、③相談スタッフとの連携、要望や課題について回答を求めた（図 6）。

生徒支援の項目では、「生徒の抱える問題背景について十分に理解できている」の問い合わせ、「あまり当てはまらない」50%、「まったく当てはまらない」6%で、生徒理解に課題を感じている教職員が半数以上を占めていた。校内支援体制の項目では、「支援方針が共有されている」で、「あまり当てはまらない」56%、「支援方法と役割分担が共有されている」においても、「あまり当てはまらない」が44%となっており、支援方針や支援方法、教職員の役割分担の共有に課題を感じている実態が明らかとなった。「支援の見直しや支援の再検討が行われ共有されている」では、「あまり当てはまらない」44%、「まったく当てはまらない」6%

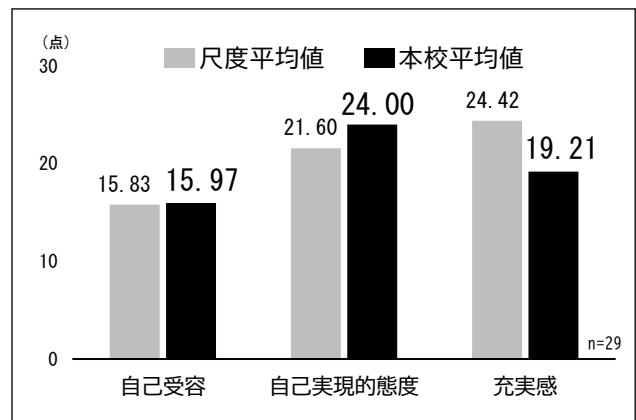


図 4 自己肯定意識尺度結果

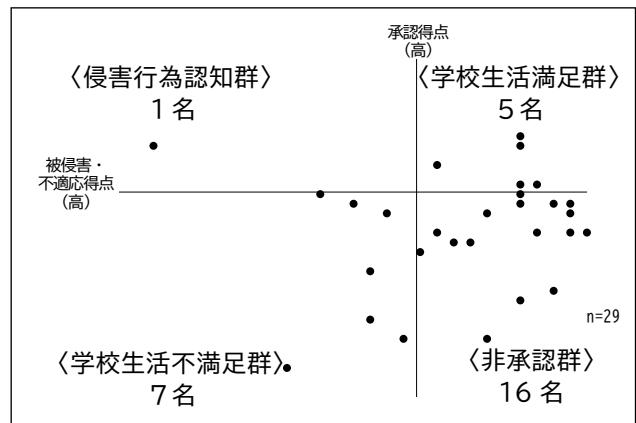


図 5 学校生活満足度尺度（高校生用）結果

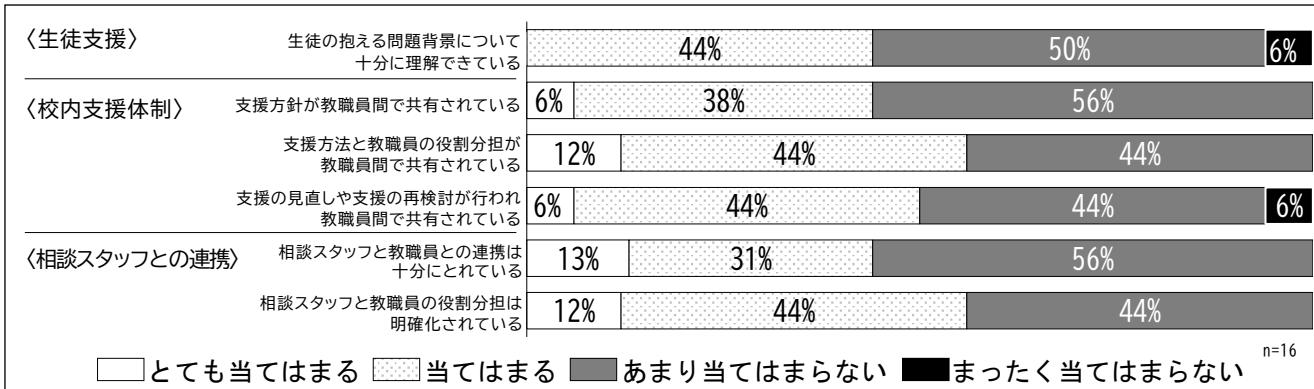


図6 教職員調査（事前）結果（一部抜粋）

で、支援の評価が適切に行われていない、と感じている教職員が半数を占めていた。

相談スタッフとの連携では、「相談スタッフとの連携は十分にとれている」の問いに、「あまり当てはまらない」が56%、「相談スタッフと教職員の役割分担は明確化されている」では、「あまり当てはまらない」が44%で、相談スタッフとの連携や役割分担に課題がみられた。自由記載では、生徒の多面的理の必要性と生徒支援における教職員の困難さの回答があった（表5）。

## ② 相談スタッフ調査（事前）結果より

相談スタッフへの調査は、学校との連携について回答を求め、4名から回答を得た。「教職員との連携は十分にとれているか」で、「あまり当てはまらない」が2名、「教職員との生徒理解は相互に十分なされているか」では、「あまり当てはまらない」が3名であった。「教職員との役割分担は明確化されているか」においても、「あまり当てはまらない」が3名で、調査結果より、教職員との連携と役割分担に課題がみられた。

## 2 生徒指導部会におけるサポートシートを活用した実践

### （1）チーム支援についての実践

本研究では、校内のチーム支援に焦点をあて、健康相談の充実につながる支援の工夫として、生徒指導部会におけるサポートシートを活用した支援検討を試みる。緊急性がある場合や外部連携が必要な場合はケース会議による検討を行うものとし、本研究の対象からは除く（図7）。

#### ① 支援対象生徒の把握

登校時の健康観察・体温チェックや日常の生徒との関わり、

表5 教職員アンケート回答（一部抜粋）

- 全職員で生徒個々の家庭環境やアルバイトなどの個人情報を把握することにより、充分な生徒支援に取り組むことができるのでは。
- 生徒情報交換などで、生徒情報をできる範囲で共有できている。しかし、問題解決に向け支援方針が分からず、何をどの程度、どんなふうに関わればよいのか分からぬ。

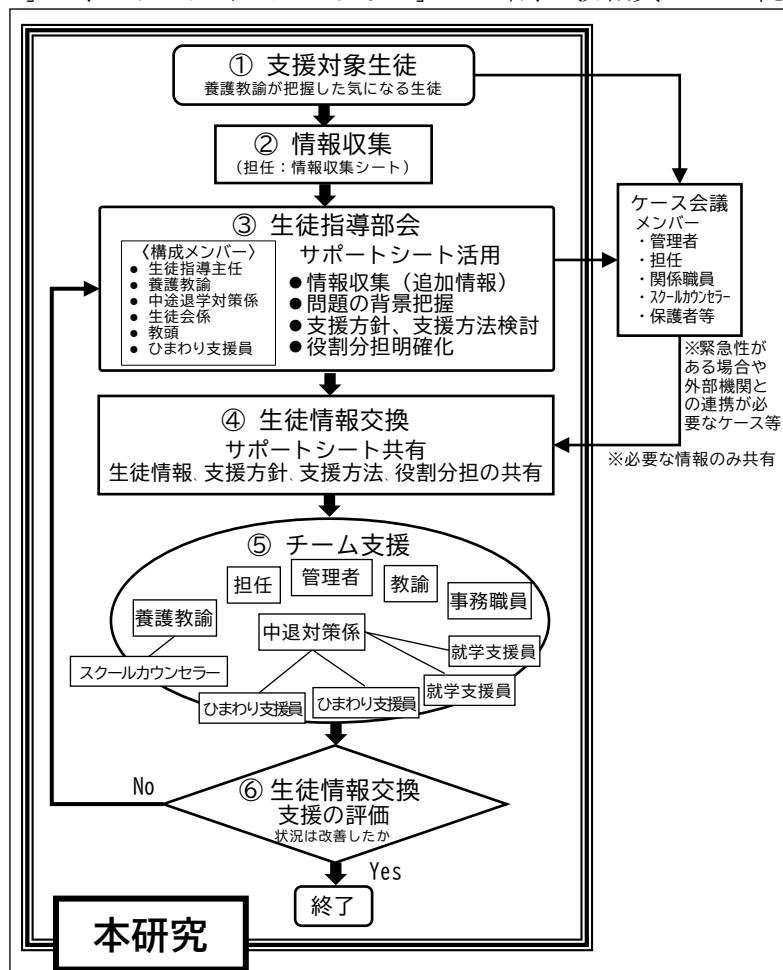


図7 本研究における生徒支援のイメージ

欠席状況などから養護教諭が把握した気になる生徒3名を本研究の支援対象とした。

## ② 情報収集シートを活用した背景の把握

サポートシートの情報収集の視点に、その他の欄を追加したアセスメントのための情報収集シートを作成し、担任から支援対象生徒の情報収集を行った（図8）。その後、サポートシートに担任からの情報を記入し、生徒指導部会で得られた情報を加え、生徒の多面的把握につなげた。

## ③ サポートシートを活用した支援方針・支援方法の検討

生徒の問題背景の把握を行い、支援方針、支援方法、役割分担を検討し、支援内容をサポートシートへ追加した。支援期間を約2週間とし、支援評価日を設定した。

## ④ 生徒情報交換におけるサポートシートの共有

生徒指導部会の後、生徒情報交換で全職員にサポートシートの内容について共有を図った。養護教諭が把握した支援対象生徒の気になる状況と、生徒情報及び支援方針、支援方法、役割分担を共有し、チーム支援の取組と支援期間、評価日について確認した。サポートシートはファイリングし、生徒情報交換の後、全職員及び相談スタッフで回覧し内容詳細の共有を図った。回覧時は個人情報の保護に十分配慮し、回覧後は養護教諭が鍵付き棚に保管した。

## ⑤ チーム支援の実施

サポートシート共有後、役割分担に基づきチーム支援を実施した。

## ⑥ 支援の評価

支援実施後、支援評価日に生徒情報交換で生徒変容の様子を共有し、支援の評価を行った。

支援対象生徒3名とも評価は支援再検討で、生徒指導部会で支援を再検討した。

## (2) 個別支援についての実践（事例検討）

支援対象生徒3名のうち、養護教諭がチーム支援において、生活リズムの課題に睡眠のアプローチとして関わり、変容の様子がみられた生徒Aの支援の一部を表6に示す。

表6 生徒Aへの支援の流れ（一部抜粋） \*①～⑥は図7の支援の流れとする

①* 支援対象生徒 養護教諭が把握した気になる生徒	欠席が続くことが多く、遅刻も目立つ。
② 情報収集 情報収集シートによる担任からの情報	公共交通機関を利用し通学している。主な欠席理由は、お金がない時は運賃が払えず登校できないとのことだった。主な遅刻理由は、「寝坊」で、授業中の居眠りもみられた。
11/19 ③ 生徒指導部会での支援検討	支援方針を「生活リズムや家庭の経済面の状況把握、経済的支援についての情報提供」とし、支援方法と役割分担を検討した。
11/20 ④ 生徒情報交換でのサポートシート共有	事務より、生徒Aは沖縄県通学費支援事業の申請がされていないとの追加情報があった。申請書類の提供が事務からあり、担任の役割に申請書類の説明を追加した。
11/20～12/3 ⑤ チーム支援	○担任:欠席時本人連絡、通学費支援申請書類の説明(追加) ○養護教諭:声かけ、生活リズムについて話を聞く ○教科担当:見守り ○就学支援員:本人と面談 ○中途退学対策係:就学支援員との面談調整
12/4 ⑥ 生徒情報交換での支援の評価	勤怠状況はほとんど変化なし。養護教諭の関わりでは、早朝まで起き、朝方寝ていることが分かった。担任から通学費支援申請書類の説明がされたが、手続はまだ行われていない。支援評価は、本人の状況にあまり変化がないことから、支援再検討とした。
12/4 ③ 生徒指導部会での支援再検討	生徒指導部会で支援を再検討した。支援方針を「生活リズムを整えるよう促す、経済的支援についての情報提供」とし、支援方法及び役割分担を再検討した。
12/7 ④ 生徒情報交換でのサポートシート共有	生徒情報交換でサポートシートの共有を図った。
12/7～1/11 ⑤ チーム支援	○担任:欠席時本人連絡、通学費支援申請書類の説明(再) ○養護教諭:生活リズムについて健康相談 ○教科担当:見守り ○部活動顧問:生活面について話す ○ひまわり支援員:元気回復行動プランワークショップ(自分の調子の良さ、悪さを理解していくワーク)の実施 ○教頭:ワークショップ開催日程調整
1/12 ⑥ 生徒情報交換での支援の評価	欠席・遅刻ともに減少した。自ら、通学費支援事業申請手続をし、現在通学費の支援を受けている。ワークショップでは元気な自分を回復するためのアクションに「睡眠」をあげていた。養護教諭は1週間の睡眠記録を提案、前向きな姿勢で取り組んでいる。支援評価は、勤怠状況に改善はみられるが、生活リズムを整えていくことに課題があり、継続支援とした。

アセスメントのための情報収集シート	
担任へ / ( ) 生徒指導部会にて下記生徒について支援検討を行います。 生徒を多面的に理解するため、下記の視点から情報収集を行います。 ご協力よろしくお願いします。 年 氏名	
【気になる様子】	
学校生活 口欠席・欠課多 口保健室利用多	
学習面 口未履修懸念	
心身の健康 口身体的不調 口精神的不安定 口自傷 口希死念慮	
人間関係 口友人関係（校内・外） 口家族関係（誰との：）	
家庭環境 口経済状況 口家庭環境変化	
仕事・アルバイト	
その他	

図8 アセスメントのための情報収集シート

支援検討にあたり、養護教諭が把握した気になる状況に、担任及び生徒指導部メンバーからの生徒情報が加わることで、生徒の多面的理解と具体的な支援検討へつなげることができた。また、サポートシート共有の際、事務職員から沖縄県通学費支援事業申請についての情報が加わり、担任から生徒Aへ申請手続の説明がなされ、通学費支援受給につながった。ひまわり支援員によるワークショップでは、元気な自分を回復するためのアクションのひとつに睡眠をあげていた。その後、養護教諭が促した1週間の睡眠記録に前向きに取り組む様子がみられた。欠席状況や遅刻の改善はみられたが、今後も生活リズムを整えていくことに課題があり、継続支援と評価した。

### (3) サポートシートを活用した実践の評価

本研究における支援終了後、サポートシートを活用した支援検討及びチーム支援について、生徒指導部会メンバーと教職員、相談スタッフへアンケート調査を行った。

#### ① 生徒指導部メンバー調査結果より

生徒指導部メンバーを対象に、支援検討に関する調査を実施した。「サポートシートを活用した支援検討」では、「生徒の現状や問題点などが、ひと目で把握しやすかった」「様々な角度から支援が行えることに気づき、全職員で共有することができ良かった」など、肯定的意見がほとんどであった。「支援検討の際、生徒の抱える問題の背景把握ができたか」では、全員が「できた」「ある程度できた」と回答していた。「支援方針、支援方法を検討しチームで役割分担し組織的対応につなげることができたか」では、多数が「できた」「ある程度できた」の回答であった。「支援検討メンバーは適切だったか」では、「担任の参加が必要」の回答が多数あり、「特別支援コーディネーターを含めたほうが良い」の回答もあった。感想には、サポートシートを活用した支援検討に肯定的意見が多くあり、組織体制への意見もあった（表7）。

#### ② 教職員調査（事後）結果より

生徒支援に関する課題について、支援前後の調査結果を比較分析する（図9）。

「生徒の抱える問題背景について十分に理解できている」では、「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」の割合が56%から47%へ減少した。「支援方針が共有されている」では、「あまり当てはまらない」が56%から23%へ減少、「支援方法

表7 生徒指導部会メンバー感想（一部抜粋）

- 意識して対象生徒を観察し続ける必要性に気づきました。
- サポートシートは生徒の問題点などが把握しやすくよかったです。今後も活用していくものだと思う。
- いろいろな所からの情報を共有することで、「できる支援」に気づくことができ、とてもよかったです。
- 組織で生徒対応できる仕組みが確立していけば、職員の負担感は激減すると思う。仕組みづくりが急務だと感じた。

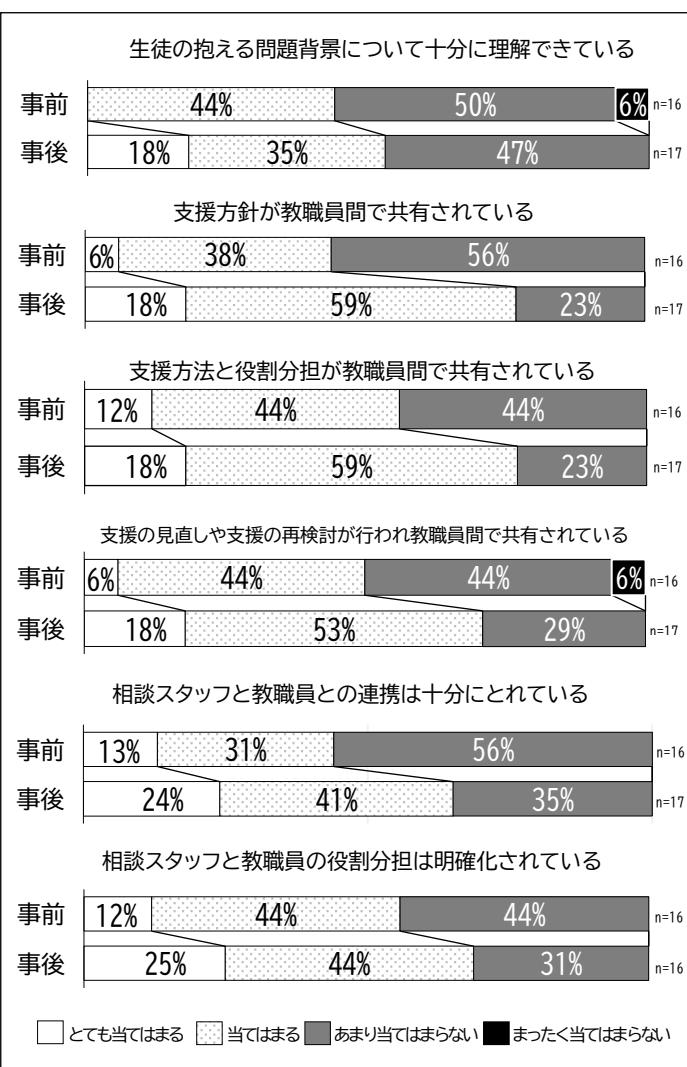


図9 教職員調査結果（一部抜粋）

と役割分担が共有されている」においても、「あまり当てはまらない」が44%から23%へ減少した。「支援の見直しや支援の再検討が行われ共有されている」でも、「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」の割合が50%から29%へ減少した。「相談スタッフとの連携は十分にとれている」では、「あまり当てはまらない」が56%から35%へ減少し、「相談スタッフと教職員の役割分担は明確化されている」では、「あまり当てはまらない」が44%から31%へ減少した。感想には、「サポートシートを基に、支援方法、役割分担へ繋いでほしい」「サポートシートの継続的な活用」など、サポートシートの活用に肯定的意見もみられた。

### ③ 相談スタッフ調査（事後）結果より

教職員と相談スタッフの連携及び役割分担の課題について、支援前後の調査結果を比較分析する（図10）。「教職員との連携は十分にとれている」では、「あまり当てはまらない」が事前調査では50%であったが、事後調査では相談スタッフ全員が「当てはある」と回答した。「教職員との生徒理解は相互に十分なされている」においても、「あまり当てはまらない」が75%から20%へ減少した。「教職員との役割分担は明確化されている」では、「あまり当てはまらない」が75%から60%へ減少した。自由記載では、「役割分担については時間をかけて直接話し合う機会が必要」「週1回の勤務でサポートシートを見直す時間がなかった」などの意見もあった。また、サポートシートを共有することで、「生徒の全体像が可視化され把握しやすくなった」「それぞれの支援内容が分かり支援しやすくなった」「情報共有がスムーズに行えることは効率的でよい」などの感想もみられた。

## 3 考察

### (1) サポートシートの活用

生徒指導部会メンバー及び教職員、相談スタッフの調査結果から、生徒の抱える問題背景の把握についてサポートシート導入前よりも改善傾向が示された。これは、サポートシートの情報収集の視点が生徒の多面的理解につながったと考える。さらに、情報が紙ベースにまとめられ可視化されたことで、生徒Aの支援のように、事務職員から通学費支援事業申請に関する情報が加わるなど、不足している情報を補うことにつながった。サポートシートの活用により、生徒の全体像が把握しやすくなつたと思われる。また、サポートシートにまとめられた生徒情報から問題背景が把握しやすくなつたことで、より具体的な支援方針や支援内容と役割分担の検討につながつたと考える。サポートシート1枚に、生徒情報と支援策及び生徒変容と評価内容を確認できることで、支援の概要把握が可能となつた。本校は、教職員の異動サイクルが全日制と比べ短く、継続した生徒支援は特に重要となる。切れ目のない生徒支援に向け、年度末の引継ぎにサポートシートを活用するなどの工夫も必要である。

### (2) 健康相談に対応する組織体制の整備

生徒指導部会で養護教諭が把握した気になる生徒の情報を共有し、支援検討を行つた。養護教諭が問題を一人で抱え込むことなく、得られた情報を共有し、担任や生徒指導部メンバーからの情報が追加されることで生徒を多面的に理解することができ、健康問題の背景が把握しやすくなつたと考える。また、様々な視点からの支援策が提案され、支援方針や支援方法及び役

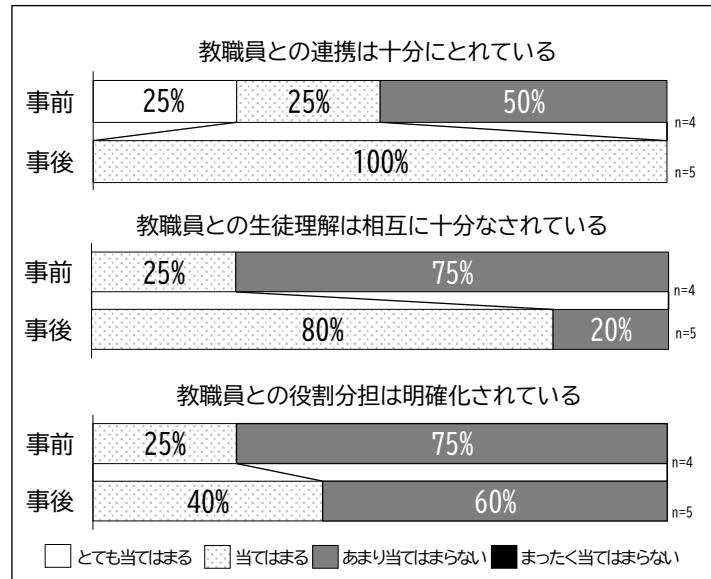


図10 相談スタッフ調査結果（一部抜粋）

割分担について、メンバーで検討することができたことは、よりスムーズな生徒対応につながったと考える。さらに、生徒指導部会で支援検討の仕組みをスタートさせたことは、健康相談に対応する組織体制の整備につながり、健康相談の充実を図る取組となったと考える。田渕久美子ら（2017）は、「学校として対応すべき問題としてどのようにとり上げていくのかという時の、手続きが校内で確立していかなければならないだろう。」と指摘しており、チームでの支援体制の重要性について述べている。今後は、生徒指導部会における支援検討の定例化を図り、機能する組織体制とする必要がある。また、生徒指導部会での支援検討にあたっては、担任からの生徒情報が支援の多くに関わることや、学習面で配慮が必要な生徒もいることから、生徒指導部会での支援検討メンバーについて、再度検討を図る必要がある。さらに、生徒実態把握のため実施した「学校生活満足度尺度」「自己肯定意識尺度」の結果から、個別の支援が必要な生徒が多数在籍していることが示された。生徒の多面的理解と客観的な支援評価を行うため、尺度結果を用いた実態把握や支援評価についても検討する必要がある。

### （3）チーム支援の実施と評価

生徒情報交換においてサポートシートの内容を全職員で共有することで、生徒情報や支援方針、支援方法、役割分担など具体的な支援が示され、取組の方向性をそろえることができ、効果的なチーム支援へつなぐことができたと考える。また、生徒情報交換において生徒の変容が共有され、定期的に支援を見直し評価したことにより、継続的支援につなげることができた。さらに、評価日を設定することで、意識的に支援対象生徒の観察を行うなど、教職員の意識変容にもつながった。一方課題としては、相談スタッフとの連携において、非常勤相談スタッフとの支援検討とサポートシートの共有に十分な時間をかけることができなかつた点があげられる。答申では、専門スタッフとの情報共有について「関係者間の情報共有が重要となることから、相互に十分なコミュニケーションを取ることができるようとする必要がある。ＩＣＴ機器等も活用し、共有すればよいもの、相談することが必要なものなど、情報の重要性等を勘案して、コミュニケーションの充実に取り組んでいくべきである。」と示されている。相談スタッフとの支援検討やサポートシートの共有方法について工夫し、チーム体制の充実を図る必要がある。

本研究では、養護教諭が把握した気になる生徒を対象に、生徒指導部会においてサポートシートを活用して支援を検討した。さらに、全職員でサポートシートを共有することで、チーム支援につながり健康相談の充実を図ることができた。また本研究での取組が、定時制課程における健康相談体制づくりの一歩となつたと考える。サポートシートの継続活用と教職員、相談スタッフとの連携の構築を図り、健康相談のさらなる充実につなげていきたい。

## IV 成果と課題

### 1 成果

- (1) サポートシートを作成、活用することで、生徒情報が可視化され生徒の全体像と問題背景の把握がスムーズに行われた。
- (2) 生徒指導部会で支援を検討し、生徒情報交換で支援内容を示したサポートシートを全職員及び相談スタッフで共有することで、チーム支援へつなげることができ、健康相談に対応する組織体制の整備を図ることができた。
- (3) 支援の評価を行うことで、継続した生徒支援につなげることができた。

### 2 課題

- (1) 次年度への継続した生徒支援に向け、サポートシートを活用した引継ぎを検討する。
- (2) 生徒指導部会における支援検討メンバーの再検討及び生徒指導部会における支援検討の定例化など、支援検討の充実や機能的な組織体制の強化を図る。
- (3) 生徒の多面的理解と客観的データを用いた支援評価のため、尺度結果の活用を図る。
- (4) 相談スタッフとの支援検討及びサポートシート共有方法の工夫を図る。

## 〈参考文献〉

- 沖縄県 2020 『令和2年度版 学校教育における指導の努力点』 沖縄県教育委員会
- 金城真知子 2019 『沖縄県立総合教育センター 第65集 研究集録』
- 三木とみ子ほか 2019 『新訂 養護教諭が行う健康相談・健康相談活動の理論と実践』 ぎょうせい
- 文部科学省 2017 『現代的健康課題を抱える子供たちへの支援～養護教諭の役割を中心として～』
- 大谷尚子ほか 2016 『養護教諭の行う健康相談』 東山書房
- 文部科学省 2011 『教職員のための子どもの健康相談及び保健指導の手引き』
- 石隈利紀・田村節子 2003 『石隈・田村式援助シートによるチーム支援入門－学校心理学・実践編－』 図書文化
- 堀洋道 2001 『心理測定尺度集Ⅰ 人間の内面を探る〈自己・個人内過程〉』 サイエンス社
- 堀洋道 2001 『心理測定尺度集Ⅲ 心の健康をはかる〈適応・臨床〉』 サイエンス社

## 〈参考WEBサイト〉

- 青戸泰子・村瀬まさき 2012 「定時制高校生の自己肯定感を高める要因に関する一研究」  
[https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_8558883\\_po\\_2013-05.pdf?contentNo=1&alternativeNo=](https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8558883_po_2013-05.pdf?contentNo=1&alternativeNo=) (最終閲覧 2021年2月)
- 沖縄県 2019 「沖縄県子どもの貧困対策計画【改訂計画】」  
<https://www.pref.okinawa.jp/site/kodomo/kodomomirai/seishonen/kosodatec/documents/okinawakenkodomonohnkontaisakukeikaku3103.pdf> (最終閲覧 2021年2月)
- 笠井孝久 2015 「教育相談に対して教師が直面する困難」  
[http://opac.11.chiba-u.jp/da/curator/900118639/13482084\\_63\\_187-197.pdf](http://opac.11.chiba-u.jp/da/curator/900118639/13482084_63_187-197.pdf) (最終閲覧 2021年2月)
- 春日由美 2018 「教師の教育相談に関する困難感および自他意識との関連に関する一研究」  
[https://www.nankydai.ac.jp/library/HDR8\\_0006.pdf](https://www.nankydai.ac.jp/library/HDR8_0006.pdf) (最終閲覧 2021年2月)
- 河村茂雄 1999 「生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発－学校生活満足度（高校生用）の作成－」  
<https://core.ac.uk/download/pdf/144251679.pdf> (最終閲覧 2021年2月)
- 埼玉県立総合教育センター 2019 「チームの視点を取り入れた教育相談体制に関する調査研究〈最終報告〉」  
[http://www1.center.spec.ed.jp/?action=common\\_download\\_main&upload\\_id=14397](http://www1.center.spec.ed.jp/?action=common_download_main&upload_id=14397) (最終閲覧 2021年2月)
- 高松真砂子 2020 「養護教諭の視点から児童・生徒の教育的ニーズに対応するチーム支援の充実をめざした研究」  
[https://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/kankoubutu/r01/chouken18/pdf/chouken18\\_10.pdf](https://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/kankoubutu/r01/chouken18/pdf/chouken18_10.pdf) (最終閲覧 2021年2月)
- 田渕久美子ほか 2017 「学校における健康相談と教育相談の課題－今日求められる実践と教職員連携のあり方－」  
[https://kwassui.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_action\\_common\\_download&item\\_id=65&item\\_no=1&attribute\\_id=22&file\\_no=1](https://kwassui.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=65&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1) (最終閲覧 2021年2月)
- 中央教育審議会 2015 「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657\\_00.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657_00.pdf) (最終閲覧 2021年2月)
- 中央教育審議会 2008 「子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について（答申）」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2009/01/14/001\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2009/01/14/001_4.pdf) (最終閲覧 2021年2月)
- 平石賢二 1990 「青年期における自己意識の構造－自己確立間と自己拡散感からみた心理学的健康」  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjep1953/38/3/38\\_320/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjep1953/38/3/38_320/_pdf/-char/ja) (最終閲覧 2021年2月)
- 山本典恵 2018 「養護教諭の健康相談をいかした情報発信とチーム支援の在り方」  
[https://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/kankoubutu/h29/chouken16/chouken16pdf/chouken16\\_11.pdf](https://www.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/kankoubutu/h29/chouken16/chouken16pdf/chouken16_11.pdf) (最終閲覧 2021年2月)